

2010年5月28日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007年～2009年
 課題番号：19700661
 研究課題名（和文）帝国日本の自然誌研究：台湾・南洋諸島・琉球列島を中心に
 研究課題名（英文）Natural History under Japanese Empire: Taiwan, Micronesia and Ryukyu Islands

研究代表者 瀬戸口 明久（SETOGUCHI AKIHISA）
 大阪市立大学・大学院経済学研究科・准教授
 研究者番号：90419672

研究成果の概要（和文）：

本研究課題では、近代日本における自然誌研究からいくつかの事例を取り上げ、それらを政治的・社会的文脈に位置づけた。具体的に検討したのは、（1）日本における害虫防除技術、（2）日本における進化論受容の展開、（3）帝国日本の動物学と狩猟文化、（4）琉球列島の自然誌研究、の4事例である。これらの成果によって、近代日本が自然誌研究・農学研究体制を整備したことによって、人々と自然との関係の変容、ひいては自然環境の改変がもたらされたことが明らかになった。以上の研究成果は、一般向けの図書、学術論文国際学会等での報告として発表された。

研究成果の概要（英文）：

This study picked up several examples from natural history research in modern Japan, and described its relation with political and social context. It consists of four research topics: (1) Economic entomology, (2) Reception of Darwinism, (2) Zoology and hunting culture, (4) Natural history in Ryukyu Islands. As a result, I elucidated that Empire building of modern Japan had serious impact on natural history and agricultural research, human-nature relationship, and environment in both colonies and Japanese mainland. This study was published as a popular book, several articles on academic journal, and presentation at international meetings.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	360,000	2,360,000,

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：科学技術史・科学社会学

キーワード：応用昆虫学、進化論、鳥類学、植民地科学

1. 研究開始当初の背景

本研究は、近年の科学技術史における2つの研究動向を踏まえて企画された。

(1) 帝国と科学

18世紀ヨーロッパにおいて誕生した自然誌研究が、その後の帝国主義的拡大と並行して進展してきたことは、これまでの科学史研究でもしばしば指摘されてきた。とりわけよく研究されてきたのは、18世紀以降の大英帝国における資源植物学である。さらに近年では、環境史の立場から帝国の自然誌研究を取り上げ、帝国主義が自然破壊や自然保護に与えた影響を検討する研究も現れはじめている。それにもかかわらず、東アジアにおいて日本がおこなった自然誌研究をあつかった科学史研究は、ほとんど進展していないと言っている。

(2) 戦争と科学技術

戦時体制が科学技術研究に与えた影響については、これまでの科学技術史研究においても重要なテーマであった。そのなかでも近年、軍事技術史と環境史の境界に注目した研究があらわれつつある。とりわけ占領地における農業政策・自然保護政策を通して、戦争と自然誌研究は深いかかわりを持つ。したがって帝国日本の自然誌研究を検討することは、戦後東アジアの農業政策を理解する上でも重要な意味を持つ。

以上のような背景を踏まえ、本研究では近代日本の自然誌研究を政治的・社会的文脈のなかに位置づけ、それが農業や自然保護などの環境政策にどのように利用されたのか明らかにすることを目指した。

2. 研究の目的

以上のような問題意識を踏まえ、本研究は戦前期の東アジアにおいて日本がおこなった自然誌研究について検討し、生物学研究と開発や植民地統治との関係、さらには戦争との関わりを明らかにする。ここでいう「自然誌研究」とは、植物分類学・動物分類学などの基礎的な博物学だけにとどまらず、農学における有用な資源植物の研究なども対象に含まれる。とくに本研究では、台湾・南洋諸島・琉球列島を対象とした自然誌研究を中心にあつかい、19世紀末から1950年代までを対象として検討する。

3. 研究の方法

基本的に資料調査が研究の中心となる。本

研究課題中に調査したアーカイブ等は以下の通り。

2007年度：名和昆虫研究所

2008年度：宮内庁書陵部

全米科学アカデミー

2009年度：沖縄県公文書館

沖縄県立図書館

また科学史関係の国内外の学会に出席して意見交換をおこなった。とりわけ2009年12月には「生物学が語る『自然』のポリテックス」(生物学史分科会シンポジウム)を企画し、本研究課題と共通する問題意識を持つ研究者の組織化に着手することができた。

4. 研究成果

本研究期間内におこなった研究の成果は、おもに以下の4項目である。

(1) 日本における害虫防除技術

近代日本における害虫防除技術の展開について検討し、明治以降の農学研究体制のなかに位置づけた。とくに設立された名和昆虫研究所に所蔵されている資料を調査し、私立農学研究期間が明治大正期の農業教育に於いて重要な役割を果たしたことを明らかにした。

また、植民地台湾におけるマラリア対策と昆虫学研究の関連についても検討し、衛生昆虫学が植民地統治や戦時体制のなかから確立したことを明らかにした。

以上のような研究を通じて、近代日本の科学技術体制の整備と自然環境の改変の歴史的展開を説得的に明らかにすることができた。

本課題の成果は、雑誌論文、学会発表、著者である。とくに著書『害虫の誕生』は新聞各紙で書評されるなど、多くの読者を得た。

(2) 日本における進化論受容の展開

2009年のダーウィン生誕200年記念に際し、日本における過去のダーウィン記念行事を調査した。具体的に検討したのは、日本の生物学者たちが進化論受容をめぐるどのような歴史認識を持ってきたのかという問題である。これまで日本の進化論受容はE.S.モースを中心に語られてきたが、じつはこのような歴史認識はダーウィン記念行事を通じて構築されたものであることを明らかにした。本研究では、これまでの歴史認識を「モース神話」と名付け、それに代わる今後の歴史叙述のあり方について考察した。

本課題の成果は、雑誌論文、学会発表

である。

(3) 帝国日本の動物学と狩猟文化

日本における狩猟文化の展開を政治的文脈に関連付けて検討し、動物学との関係について検討した。そこで明らかになったのは、明治以降の日本の狩猟文化が、西洋からの銃猟の導入によって劇的に変容したということである。この変容は皇室など明治政府の支配層によってすすめられ、そのなかから鳥類学が成立したことを明らかにした。

さらに大正末期以降は、官民ともに「伝統狩猟」を強調するようになるが、その背景に植民地支配やナショナリズムをめぐる言説があったことを明らかにした。

本課題の成果は、雑誌論文、学会発表である。

(4) 琉球列島の自然誌研究

米軍統治下の琉球列島における自然誌研究と森林政策、景観政策との関連について、全米科学アカデミー、沖縄県公文書館、沖縄県立図書館などの資料を調査した。本項目の研究成果については未発表である。現在取りまとめをおこなっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

瀬戸口明久「ダーウィンを記念する——日本における進化論受容をめぐる歴史認識の形成」『生物学史研究』83(2010): 1-19。(査読有)

Akihisa Setoguchi, "Darwin Commemorations and Three Generations of Historians of Biology," *East Asian Science, Technology and Society: An International Journal*, 3 (2009): 531-537. (査読なし)

瀬戸口明久「狩猟と皇族 雑誌『獵友』に見る動物をめぐる政治・科学・ジェンダー」『動物観研究』13(2008): 39-50. (査読なし)

Akihisa Setoguchi, "Control of Insect Vectors in the Japanese Empire," *East Asian Science, Technology and Society: An International Journal*, 1 (2007): 167-181. (査読有)

〔学会発表〕(計8件)

瀬戸口明久「狩猟と動物学の近代」日本科学史学会生物学史分科会シンポジウム「生物学が語る『自然』のポリティクス」(東京大学、2009年12月13日)

瀬戸口明久「モース神話を問い直す」第11回日本進化学会大会(北海道大学、2009年9月3日)

Akihisa Setoguchi, Imperial Ornithology: Hunting, Natural History and Japanese Empire Building, ISHPSSB 2009 Meeting, (University of Queensland, Australia, 2009年7月16日).

Akihisa Setoguchi, Darwin Commemorations and Three Generations of Historians of Biology, EASTS Conference, (National Yangming University, Taiwan, 2009年6月19日).

瀬戸口明久「記憶が歴史になるとき」日本科学史学会第56回年会(九州大学、2009年5月23日)

瀬戸口明久「ダーウィンを記念する」日本科学史学会生物学史分科会シンポジウム「ダーウィン進化論の誕生と波紋」(桃山学院大学、2008年12月7日)

瀬戸口明久「帝王/帝国の鳥類学」日本科学史学会第55回年会(電気通信大学、2008年5月25日)

Akihisa Setoguchi, War and Biology: The Transformation of Entomological Research in Japan, 1918-1945, ISHPSSB 2007 Meeting, (University of Exeter, England, 2007年7月26日).

〔図書〕(計2件)

瀬戸口明久「『自然の再生』を問う 環境倫理と歴史認識」鬼頭秀一・福永真弓編『環境倫理学』(東京大学出版会、2009年)第10章(分担執筆)

瀬戸口明久『害虫の誕生 虫からみた日本史』(筑摩書房、2009年)(単著)

〔その他〕

上記著書『害虫の誕生』に関連したインタビュー記事は以下の通り。

『日本農業新聞』2010年2月25日

『読売新聞』2009年8月30日

6 . 研究組織

(1)研究代表者

瀬戸口 明久 (SETOGUCHI AKIHISA)
大阪市立大学・大学院経済学研究科・准教授
研究者番号 : 90419672

(2)研究分担者

なし

(3)研究連携者

なし